

説示一物

第93回 若い医師たち
南淵明宏 (昭和大学教授)

今年も受験のシーズンである。昨年度は私の周囲では多くの医学部合格者が出た。今年はどうだろう？

年々医学部医学科の希望者は増え、難易度も高くなっているようだ。

早くも今年の流行語大賞の呼び声高い、「国会議員の口利き」も今年ばかりは自粛されたであろうから、なお一層のガチンコ勝負であったに違いない。

それだけに全国津々浦々でドラマが生まれていることだろう。

前期は絶対ダメと思って後期の宿探しをしていたら合格した！ 私立も国立も全部ダメ、と思っていたら3月30日の朝に追加合格の電話が自宅にかかってきた！ 身近でもいろいろな話を聞く。

どこかの国の総理大臣は1回も受験勉強をしたことがない、ということだが、受験勉強をくぐり抜けた人にとって、受験はドラマである。医者なら全員がそうだ。

受験にまつわる話がみなドラマチックに聞こえるのは、自分もそうだったからだろう。だから、受験生の感動や絶望にすぐ感情移入できる。

そして皆必死だから、個性満点の面白いストーリーが出来上がる。一生の語り草なのである。

受験科目をどう選んだか？ そして志望校はどう選んだか？ そもそも医学部受験をどう決めたのか？

自分の受験ストーリーを思い出すと、判断や選択、行動は、浅はかな子供じみたものであったとしても、

自主的であったことを思い出す。

誰の受験ストーリーも皆そうだ。受験を含めた進路決定は自主行動の極致といえる。もちろん、高校を卒業する時の通過儀礼なのだから当たり前、ともいえる。

医学部に入学した後、卒業の時の初期研修、そして専門診療科の決定と、自主性が100%求められる。

情報が即座に伝わる時代である。

昔のように大学医学部という環濠集落のごくごく限られた情報と狭い狭い世界に身を任せ、「何となく……」で流されて知らない間に医局に入っていた……ということなどあり得ない。

今、病院で見かける若い世代の医師たちは、独立独歩、自主独行の強者たちと見受けられるのである。いや、そう認識すべきだと思う。

「そうかなあ？ あまり元気がないように見えるけどなあ……」

「とんでもないやつが多いよ。第一礼儀知らずだ！」

おじさんたちの中には自分の若い頃のことをすっかり忘れてしまう人が多い。

今の若い世代の医師たちは大変だ。

新専門医制度がスタートする。行政に医者どもを隷従させるための制度である。何から何までがんじがらめ。自由がない。一番問題なのは、途中で「抜けられない」点だ。「あっ！ この指導員ムリ！ タバコは吸うし、勉強してない！」と思っても逃げられない。

かわいそうなのは、研修とは名ばかり、我慢してバカに仕えなければならない、という可能性があることだ。

貧相で知識がなく、志もない、第一に度胸がない。卑怯でせこく狭量。

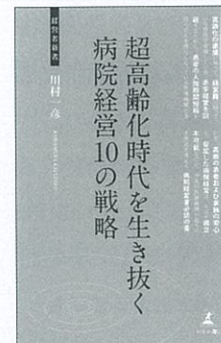
「なんでこんなやつの下で」

そういう事態にならないように、とにかく指導医の技量と人間性をまず担保すべきではないだろうか。

BOOK ブックレビュー

『超高齢化時代を生き抜く病院経営10の戦略』

超高齢社会を迎える中、国は医療費抑制策として、患者の平均在院日数を短縮させる方針を打ち出している。医療機関も赤字を避けるため、短い入院期間で患者を回転させる体制にシフトしている。しかし、これでは高齢患者や家族が安心して医療を受けることは難しい。患者や家族の安心と、安定した病院経営はどうすれば両立できるのか。神奈川県相模原市の相和病院で理事長兼病院長を務める筆者が、その疑問に回答する。同病院は当初、介護型の療養病院だったが、赤字続きで巨額の負債を抱えていた。筆者は8年前、



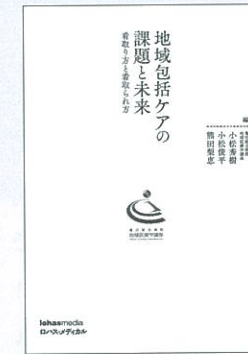
川村一彦
幻冬舎メディアコンサルティング
800円(税抜き)

理事長に就いた際、慢性期の重症患者を最期まで治療する医療型の療養病院に転換。その結果、現在では黒字経営を実現している。自らの経験を踏まえ、患者が安心して長期療養でき、かつ黒字経営できる病院づくりについて、具体的なアドバイスを示している。

『地域包括ケアの課題と未来—看取り方と看取られ方—』

筆者の1人は、医療界の論客で、亀田総合病院で副院長を務め、昨年秋に懲戒解雇処分を受けた小松秀樹氏。同氏は、自分に批判された厚労省や千葉県職員の補助金を盾に同病院に圧力を掛け、懲戒処

分に至ったと主張。公務員による言論弾圧事件として検察に告発し、今後の展開が注目されている。この本も今回の騒動に絡んでいる。同病院は地域医療再生臨時特例交付金を受け、小松氏がプログラム・ディレクターを務める地域医療学講座が発足。同講座の活動の一つとして、本書の出版が計画された。その後、



小松秀樹、小松俊平、熊田梨恵
ロハス・メディカル
2000円(税抜き)

県から交付金の減額や打ち切りが通知される中、やっと出版にこぎ着けた。本書には、医療や介護の現場で活躍する有識者たちが、それぞれ抱える課題やメッセージがふんだんに盛り込まれている。これらの声を通じて、これからの地域医療の在り方や問題点を明らかにしている。

『長尾先生、「近藤誠理論」のどこが間違っているのですか？—絶対に後悔しないがん治療—』

医療界から大反発を受けながらも売れ続ける「近藤誠本」。筆者は近藤氏の主張の出発点を過剰ながん医療への「怒り」と分析し、共感する。一方で、完治可能な状態なのに、がん治療を一切拒否する患者が増えるなど、近藤誠本の被害者が増えていると指摘。そして、「どちらの味方でもない」とした上で、「近藤理論」の正しい点と間違った点を説明する。また、近藤誠本が売れる「近藤誠現象」の背景に、医療側

長尾先生、「近藤誠理論」のどこが間違っているのですか？

長尾和宏

がんもどきで、なんやねん？ どうなんやねん？ 本家のどこのどないしたん？ ええねん？

絶対に後悔しないがん治療

長尾和宏／ブックマン社
1300円(税抜き)

の問題もあると考え、がん医療界の正しい点と間違っている点を指摘。中庸を旨とする筆者は正か誤かの二元論を採らない。在宅ホスピス医としてがん患者の味方であり続けたいと考え、本書ではあくまでも患者目線のがん医療を考えている。